■特集・さて、どう生きようか——若者の軌跡

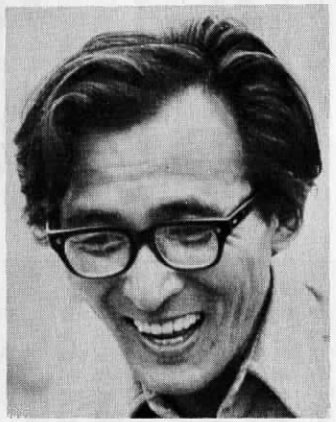
［座談会］

今どこへゆくのか

三人の共同体実践者に聞く

●山尾三省

●原　康男



●野本三吉

自分の一点で

司会　今日は、部族の山尾三省さん、厚木振出塾の原康男さん、それに最近横浜の寿町で仕事をはじめた野本三吉さんに集まってもらったわけですが、ごくくつろいであれこれ話してゆきたいと思います。お互いに久しぶりだったり初顔合わせだったりするので、まずこのごろ何をし何を考えているのかといったことから話していって下さい。

野本　今まで色々やってきたけど、ともかくあっちこっちまわってみて、結論的にいえば、どこでも同じような問題にぶちあたったわけです。とすると、どこかへ行ってやらねばならないということではなくて、今自分が住んでいるところで始める以外ないだろうと考えたわけです。

この数年間の旅の中で、この世の中に中心というものはない、ましてや人間は世界の中心ではないということを知ったわけです。ということは、反面、仮定的にどこを中心にしてもよいということではないか、無数の中心があると考えてもいいのではないかと考えたわけです。だから、ぼくは、ぼく自身が現在立っている点を中心として考え、そこを仮の立場として生きることができると思い、その一点をさがしていたわけです。

この四月に決まったそのぼくの「場」は、横浜の寿町という簡易宿泊所（ドヤ）街のまん中にある「寿生活館」というところ。ここは山谷や釜ヶ崎のように名は知られていないけれど、この街には八十軒ほどの簡易宿泊所が並び、七千人ほどの人々が日雇労働者として生活しているわけです。

寿生活館というのは、そこの住民の福祉のためということで数年前につくられたのだけれど、そこで働きたがる人があんまりいない。ここは横浜市の民生局の管轄になっていて、そういう意味でぼくは役人になったわけ。ところが、そこでは役所の人間として住民に相対したりしたら、ほとんどコミュニケーションが成立しない。いろいろむづかしい問題があるわけです。ともあれ、そこで実際にはじめたわけです。

寿町へ行くことになったのは、釜ヶ崎とか山谷とかそういうところじゃないと本当の人間に会えないという風な気持にどうしてもなって、それ以外ではぼくは駄目だと思ったんだな。それに、あそこが自分自身の肌合いに合うからな。あそこの人たちは、みんな開けっぴろげだし……。

ぼくが考えたのは、そこが大変だからそこに光を当ててやるというんじゃなくて、まったく逆に、今はみんな暗くしかそこを見ていないけれど、実はそこが光なんで、その光を外に出さなければいけないんじゃないかということで、その中で自分に何ができるだろうと考えたわけです。

とくにあそこの子供たちには、ものすごく未来を感じる。あの子供たちは、はじめ一年生で二、三日学校へ行くだけで見抜いちゃって、あとは全然行かないんだな。大人の人たちもそうだけれど、あそこの子供たちはものすごく直感が鋭いから、相手が本物かどうかピッと見抜いちゃうんだな。そういう意味では非常に恐い。こういう鋭さは、普通の生活をしている人は忘れちゃっていると思うんだ。彼らから学ぶ点はすごくあります。

関係の模索

野本　生活館では図書室を開いているんだけれど、他の場所と違って、名前と年令とどこに泊まっているかがわかったら、すぐにどんどん本を貸し出すことにしている。だから、月に六十冊ぐらいはなくなっちゃうわけ。だけど逆に、「こんな無担保で本を貸すというのは、オレは始めてだ」と酔っぱらいながらいう人がいたりして「信用してもらって、絶対にオレは返しにくる」というんだな。そんな人が一人でもあると、なくなったって一向にかまわん。そんな風なつながりが段々広がってゆくとよいと思ったりする。

山尾　面白いですよね。本が一冊もない図書館なんていうのは。（笑）

野本　この間、ぶ厚い『広辞苑』がなくなったんだ。しばらくしたら、黒メガネをかけて大きなマスクをかけた人がね、ことさら帽子をまぶかにかぶって、「ここに『広辞苑』が

あったけど、どうした。」っていうんだ。あ、この人だなと思ったけれど、「みんな読みたがっているけど、なくなっちゃったんだ。」といつたら、「あんなもの売ったって売れないじゃねえか。オレはせっかく読みにきたのに。」とか、さかんにいってたんだ。

それから三日後、「川っぷちに新聞紙にくるんだ『広辞苑』が落ちていた。」と持ってきてくれた人がいたんだけれど、それがその人なんだよ。（笑）大体顔の輪郭でわかるんだよ。そんで、どうもありがとうございました、本当に助かる、とぼくは一生懸命いったわけだ。それで彼も安心して自分の名前や何やらいうんだよな。

そういう感じで、実に不思議なつながりなんだな。ああいうところでは、本物のつながりができるかも知れないと思うんだな。これからどれだけあそこで持続できるか、一つの賭けになるな。

野本　今、公的な社会のインサイダーとでもいえる地方公務員になって、やはり中央政府に対する地方自治の問題を考えざるをえなくなっているわけです。すでに完全に中央集権の一環として組織されてしまっている地方自治体を内側からつくりかえてゆくという努力をしなければならないと思っている。

もともと地方自治体というものは、顕在化した共同体と同じような内容を持っているわけです。とくに、ぼくの民生というような仕事でいうと、社会福祉であり公的扶助なわけ。相互扶助の精神をもっとも生かすべきところだな。ところが、現在では、そこがもっとも予算の少ないところになっている。そこのところに、単に良心だけで問題としてかかわるのではなく、物理的な面で例えば軍事の方に使っている金をこっちへ使わせてくれだとかいうことも寿町の人たちと一緒にやらざるをえなくなってくるのではないか。

野本　今月からこの「生活者」という個人誌を出しはじめたんです。（創刊号の五月号は大型八ページのきれいなタイプ印刷で、表紙には、彼自身が青森県の宗教共同体、松緑道大和山で白装束にハチマキ姿で滝にうたれて水行している写真が出ている。）

これを出しはじめたのは、自分は一つのところを掘ってゆき、また他の人は違うところを掘っているわけで、それぞれがやっている営みをつなぎ合わせてゆく一種の開かれたコミューンをつくってゆきたいと思ったからです。こういった個人誌というのはある種の手紙の代りなんだけど、ぼくが今こうしているというのをパアーッと出すと、どこかからか反応がある。すると、体は離れていても自分の心が向うへ旅し、向うの心がこちらへ旅してきたというコミュニケーションが成立するさ。今のように物理的な旅ができなくなった時に、こういう形式が出てきたわけです。これも一種の共同体の顕在化した姿だと思う。

この個人誌もいつまでつづくかわからないけれど、今の気持としては、小さいものだけれど、死ぬまで続けたいと思っています。

離れていても

山尾　今は、以前から仲間でやっている「ほら貝」というスナックを国分寺でやっていて、ぼくもその店に毎晩出ています。あと雑誌を三ヵ月に一度ぐらいのペースで出していて、その他は格別の動きはやっていません。

司会　岩手の方で新しい「瞑想センター」のようなものをつくるという話しですが。

山尾　それもこれからやろうと思っているんだけれど、土地が手に入らないんですよね。

土地ブームで値上りしていて、地主が値上りを見越して手離さなくなっているんですよね。だから、時期を待っているわけです。

ただ、今野本さんが言ったように、無数の中心があって、あらゆる点が中心であるということにならざるをえなくて、それでやる以外にしょうがないという感じがしますね。だから今、ぼくらのスナックで仕事をしているわけですけど、それを一生懸命やるだけのことだという気がします。

野本　部族にあつまる人たちの傾向が、以前と変わったということはないですか。

山尾　一時より落ちついてきていますね。結局、生活ということ、やはり食べてゆかねばならぬということを大切にしてゆこうという傾向ですね。

また、今までは、富士見（長野県）とか諏訪之瀬（沖縄に近い島）とか東京とか、主に三つの場所で固まって住んでいて、それを行ったり来たりしていたわけです。それが最近では、あちこちにみんな散ってそれぞれの場所でスナックをつくろうとしたり、それぞれに生活の拠点をつくりはじめているんですよね。熊本、宮崎、北海道など、いろんなところでそうした動きが出てきましたよね。

みんな少しづつ変わってきているんです。四、五年前は、共同体というようなイメージがかなり強烈にあったわけです。ところが今は、すでに共同体なんだということが、みんなわかっちゃったわけです。ひとりでポツンと離れて生きていても、一つの大きな宇宙的な共同体の中にいるにすぎないのだということが、はっきりわかっちゃったから、それぞれ静かに暮しているだけですね。

ただ、やっぱりそれだけでも困るということがあるわけで（笑）岩手に何かつくろうと考えたり、地方都市に分散してそれぞれのイメージに従って何かやろうという動きがあるわけです。

原　国分寺での共同生活体を解散したのは、どういうキッカケからだったのですか。

山尾　直接的には、アパートの持主がアパートを売るっていい出して、立ちのいてくれというので出たのですけれど、その時、もう一回また別のアパートをかりて一緒にやるかといったら、みんなもういいって言うんですね。（笑）それで、やめてしまったわけです。

せまいアパートの中でああいう形で何人もあつまって生活するのは、もうウンザリだといっていましたね。そんな無理にあつまらなくとも、いくら散ばっていても、つながりというのは全部あるんだというんですね。

野本　だからね、一緒にずっといなければならないと考えた時にすでにおかしいんだよ。一緒にいたかったら集り、それぞれに散っていきたい時はそうする。それがごく自然なことだからね。散っていっても、気持としては常につながっている。伸縮自在なものだね。

山尾　ぼくは仲間の中では、どちらかというと定住的なんですね。一ヵ所に比較的長く住むわけです。そうすると、定住的な人間はフラフラ歩いている仲間に対して批判が出てくるわけです。何だあいつら、軽く動いていて調子がよいと。（笑）逆に、歩いている連中は、一ヵ所に住んでいる人間に対して不満があるんですね。何だこんなところにじっとしていて、来てもちっともいい顔しないとかね。（笑）そんなお互いの不満みたいなものがあったけれど、それも最近少しづつなくなってきた感じですね。

それは、歩いている連中もいろんな体験の中で、住んでいる奴もたしかにいるんだということがわかってきたし、住んでいる奴も、うん歩いている奴もいるんだということがわかってきたということですね。（笑）

司会　今でも、若い人たちが部族にひかれてやってくるということがありますか。

山尾　今でもあとをたたないですね。でも、やってきても、ぼくらに共同体というようなものが形としてないから、わからないのですね。すると、彼らは信じられるものは一体何かと問い直しはじめるわけです。となると、さっき野本さんがいった『広辞苑』を返しにくるといった行為の中にあるような「何か」が大切になってくるわけです。自分が見たり体験したりして、これは確かに間違いはないとわかったときに、それを頼りに生きはじめるわけですよ。

野本　そうそう。（意気ごんでいう。）

山尾　生きはじめるといったら一寸大げさだけれど、自分も含めて、生きはじめればいいなあというような感じですね。（笑）

野本　たしかに変わってきましたねえ。

来る者拒まず

原　日本人が古くからずっと持ちつづけたイメージに何かあるんじゃないかと思って、あちこち歩いていたんです。（やさしいソフトな調子で語りはじめる。原さんはこれまで山岸会、心境農産、東山産業、大倭紫陽花邑などのさまざまな共同体での深い生活体験があり、それが話のすみずみににじみ出る。）

奈良周辺でとくに感じたのですが、来るものは拒まず去るものは追わずという風な精神の流れがあるんですね。心境農産の尾崎さんや大倭の法主さんの考え方も、来るものはだれがきてもいいし、出てゆくといったら「ああそうか、出てゆくんか」といって、そこには何のわだかまりも残らないというようなところがある。そうした精神のあり方が、そうすべきだからという道徳観や思想としてではなく、生活の中にあたり前のものとして残っていることがあるのね。

それから、古代神道など特にそうだけど、日本人には、唯一の神という形はとらず、八百万の神々とかいって数限りない神々をこしらえてゆくところがあるのね。ところが西洋の方では、一つの神、一つの思想に統一してゆこうとする傾向がある。日本でも、支配者の立場にある人たちにはそういう傾向が強いけれども、一般庶民の中では八百万の神々式の曼陀羅的な考え方が基盤になっている。ぼくたちは、本来そうしたものを持っているんじゃないかと感じる。

ところが、家族制度や中央集権などの歴史が長くつづいたために、大部分の人は誰かの支配下で誰かにいわれなければ動けないという風になってしまっている。と同時に、そうした状態に対する反発も出てきているわけ。

そこで、そうした支配や規則にしばられた関係をなくした小さな生活体制をつくってみたら、どんな感情がよみがえってくるのかという課題をもって、東京の近くの厚木に「厚木振出塾」という「場」をこしらえたわけです。そこでは、規則などは一切なしにして、働きたかったら働き、いややったら休み、各自思いのままに生活してみようというわけです。敷地が三反ばかりある農家を借りて、常時二〇人ぐらいの若い者が生活しているんです。生計は土方仕事で立てているわけです。

これに対する周囲の批判はいろいろ激しくて、いまだたたかれているんです。はじめのうちは、たとえ一ヵ月でも二ヵ月でもこうした実験がつづいたという事実があるならば、次の人たちはもっとそれを発展させてくれるだろうぐらいに思っていたんです。ところが、何とか一年間もすぎましたからね、これはやれるんだという気がしています。

人間というのは、強制がなく働きたい時に

働けばいいんだという風に開放しておいても、何とか集団としてやってゆけるということですね。これができるということがわかったので、今度は、もっと大分はっきりしたものができるんじゃないかと思っています。

司会　今までかなりの人が厚木振出塾を通過したんじゃないですか。

原　延べこの一年間に三百人を越えているでしょうね。だから、その人たちが北海道から南の与論島まで全国的に散っていますよね。

山尾　そうですね。散りますよね、本当に。

原　集団のカコミやワクを本当にはずした時に、そこに住む者は、その場が飽和状態かどうか自然の感覚でわかって出ていったりするのね。それは別に規則じゃなくて追い出すわけでもないんだけれど、自然に調節される何かがあるんですね。

山尾　あそこらへんは本当に面白いところですね。（と力をこめる）（笑）

原　妙味ですよね。

野本　ここでは用がすんじゃったということが、自然にわかっちゃうんだな。無理をしないで人間の集団や群れの形成ができていれば、実にうまくいっちゃうわけだ。無理にこうじゃなければダメと囲いをつくった時には、ギシギシしてくるわけだ。そういう意味では、以前やっていた共同体をつくろうといった意識的な運動の時は、かなり無理してたな。

原　そう、無理をすると人の出入りがむづかしくなり、固定された人間関係になってしまう。いったん出たが最後、二度と帰れないとか、帰れても、次に出る時はそうとうな制約をうけるという風にね。人数が減ることも恐いし、増えることも恐いという状態になってしまうわけです。

共同体のリーダー的な人ならば、自分たちの場ならこれだけの数の人間しか生活できないということを感じていて、それ以上増えた場合は何とかストップをかけねばならぬと思い、逆に減り出すと何とかそれをくい止めようとする気持が動く。でも、実際は、もっと大きな気持になって、減ってつぶれてしまったらそれもええなというような気持になるとけっこううまくいったりするんですね。

共同体の意味

司会　先日ある話合いで、共同体というのは関係と空間のどちらが先行するのかという問題が出て、共同生活をやっている一人が、まず空間を創らなくてはダメなんだ、関係はできないんだと強く主張したわけです。しかし実際には、関係と空間とが一致して顕在的な共同体を生み出す場合もあるし、人と人とのつながりだけがあって固定的な空間を生み出さない場合もありますよね。どちらにせよ重要なことは、自然で生き生きとした関係が存在するということだと思うんです。その辺、今までずい分錯覚していたところがあって、お互い同士なるべく近くにいないと共同体じゃないんだという感じ方がありましたね。

野本　さっき、山尾さんが、共同体というのはどこそこにあるから共同体ということではなくて、すべてこの世の中が共同体なんだといったことがすごくわかるね。それを今まで錯覚していて、何人か集まってつくったいわゆる「共同体」がツブれたりすると、人類は未来がないなんて気になったりしてね。（笑）でも、たとえそれがツブれたって、一切の自然を含めてすべては共同体そのものなのだからね。今までの熱にうかされたような共同体運動というのは、その辺のところをもう一度くぐり直さないとね。これから形のある共同体ができるにしても、もっと自由で流動的な形でできてくるという気がするんだ。

山尾　そうですね。これから共同体という言葉ないし実体に意味があるとしたら、そこら辺は欠かせないポイントですよね。

司会　部族の場合でも、最初は一定の空間を占拠するものとして共同体を考え、めざしていたのですか。

山尾　ぼくは、最初のうちはそう考えていましたね。それが変わってきたのは、ぼくらの共同体も外の社会とのふれ合いがいろいろあったわけですね。そうすると、外も自分たちとどうもあんまり変わりないというのが見えてきた。外でも人間が一人一人生きていて、じゃ自分たちのやっているのは一体なんだろうかとふりかえってみると、あんまり大して変わりがない。（笑）まあ、基本的に財産の共有とかいうことが大切なんだとは思いますがね……。

原　空間としての共同体はあればいいけれど、なくてもいいのじゃないかと思う。若い者にすれば、何かの足がかりをつくるために具体的な空間的なものを欲しがるということなんじゃないかと思うけれど。

野本　部族の人たちは最初、孤島とか山の中とか、自然の豊かなところへ行ったでしょう。そのへんで、最初意図したものと本質的なものが重なり合ってそういうところを選んだような気がする。ぼくの場合もそうだったんだけれど、都会文明の中では自分が本当の自然から離れてしまっているという意識があって、自然の中へ入って自分をとりもどそうというのが、そもそものはじまりではなかったかと思うんです。

山尾　たしかにはじまりはそうでしたね。

野本　それがたまたま自然の中で共同して住んだから、場所を固定されたような形での共同体と理解されたのではないかと思います。

原　都会なんかで生活していると、わりあい一人一人で別々に生活できるけど、たとえば北海道の原野にポーンと行ったりすると、一人ではどうしようもないのね。やはり何人かが固まって、何だかんだいいあって一緒にやってゆかないことには食っぺゆけない。どうしても同じ釜の飯を食い、着るものも分け合ってやってゆかねばならないわけ。

そこに異常なほどの連帯感が湧いてくる。そういう連帯感というのは、確かに何かをなしとげるにはいいかも知れないけど、それが他人を疎外するのね。自分たちと外の人間との間に、大きな境目をこしらえてしまい、かえって不自由にしてしまうのね。そうして無意識に生れてきた連帯感をもういっぺん意識的に崩してゆくことによって、外の人も自由に入ってこれる人の輪ができると思う。

そこに光がある

山尾　野本さんがさっき「そこが光なんだ」という話をしたでしょう。どういう光なのか、もう少し聞きたい気がしますね。

野本　うーん、言葉じゃなかなかいい切れないけど、一言でいうとすると、一緒に死ねるかというところまで行っちゃうんだな。

そこの人たちが、生活に困ったとかお腹が痛いとか相談にくるんだけど、そういう時にも、これはと思う人間に対しては、その人のメチャクチャでダメなところまで全部開いてね、パッと身を投げかけてくるわけ。するとオレはもう逃げられないんだよ。そうなったら、こちらも開いて、ともかくヨシッ！と二人で肩組み合って泣くとか、歌うとか、一緒になってどっかにぶつかってゆくしかないんだな。たえずそういうことをつきつけられていて、自分でも、これだけはやりたくないとか、ここまでおかされちゃうとオレはまっ黒になっちゃうとかいろいろあるんだけれど、それも全部開けたら自分も光になれるんだという気がしますね。

あの人たちは、いつも光なんだ。他の連中がきて金がなくとも、自分の持っている金を全部出してみんなに酒をふるまって、ドヤに一緒に寝て、朝になったらさて働きにいこうかどうしようかというような調子で、すべてをその時に賭けちゃう。そういう全部を出しきる生き方はなかなかないからね。そこにあるのは、相手と地獄の底までつき合えるという意味での「愛」だろうと思うんです。

それを、金がないから百円貸してくれとかいう形で日常的にぶつけられるわけだけれど、その時に、これは自分の夕飯代だからとかで貸さないと自分を守ったら、大事な何かを落としてしまうことになる。その時に百円渡してしまって自分が食わないことが何でもないような関係そのものが「光」なんだと思います。だから、貸してくれと問いかける行為そのものは、まだ光じゃないけれど、それが受けとめられた時、光になりうると感じる。

たとえば、図書館の本を持っていかれたら本当は困るんだけれど、それでもいい、どうか貸りていって下さいといった時に、その人間がどうしても返さざるをえなくなっちゃうこと、そこで人間が変わっちゃうということなんです。あそこを無視して切り捨て、あそこはダメなんだとフタをしてしまった時に、その人間は自分で永遠に闇の中にこもっちゃうという感じがする。

ぼく自身もこういうことを感じているだけで、まだ出し切っていない自分にぶつかって反省させられたりしているわけです。そういう意味で、水俣の石牟礼道子さんという人にはとても魅かれるわけ。あの人は白内障になってしまいほとんど失明に近いらしいけど、それをいとわず語りつづけ書きつづけ、テントの中に座りこんでいる。あの人がたとえ盲目になっても、あの人は「見て」いるだろう。やはり、ああいう風に生きたいね。

何にコミットする

司会　山奥の開拓農場に入りこんでガンバっている友人がいて、そこには都会の若い人たちもよく尋ねてくるんですが、その彼がどうして若い奴が全身を投げ出して何かにコミットしないのかといっていました。やらないことに対する弁解や自己防衛は上手なんだけど、自分がどう生きていったらよいのかわからないといった若者が増えてきたというんです。方向喪失感みたいなものでしょうか……。

山尾　そうですね。結局、コミットする（賭ける）対象がないわけでしょ。四、五年前にぼくらが部族だとかいってワアワア騒いでいた時には、それが一つのコミットする対象になったわけですね。あいつらは自然の中に住んでいるとかお金なしに放浪するとか、そういうことが非常に魅力だったんですね。そういう時には、若い連中がパーッとコミットしてきたんです。

ところが、いざそれをやってみたら、それは別に何ということはないんだということが分ってきたわけでしょ。すると、もうコミットすることができなくなってきた。で、他をみても、自分がコミットするとなると依然として赤軍派であるとかそういう感じしか残っていないわけです。でも、やっぱり赤軍派にはコミットできないとなると、ぼく自身に関していえば、外部的にコミットする世界というのはどこにもないんです。

その時に、どこにコミットできるかというと、やはり自分自身に帰ってきて、自分自身にコミットする以外にどこにもないから、そういうことを少しづつやってゆかざるをえな

いという感じですね。そのことが、さっき原さんのいった「来る人は拒まず、去る人は追わず」ということにつながると思いますね。

ただ、自分自身を含めて若い人たちが、たしかにコミットしていないところがあるんですね。自分自身にコミットしないんですね。一寸きついと思うと、すぐ逃げちゃう。そこらへんのところは、何年かやってみて困るなあと感じるところですね。

司会 みなさんの場合、よく若い人たちが尋ねてきて、どうしたらいいのかというようなことを相談されると思うけれど、そういう時どうしているんですか。

山尾 普通は何もいわないですね。ただ一緒にお茶をのんで飯を食ってという感じですね。議論しても、本当にしょうがないですね。

原 議論なんかいらないね。ポソッと入ってきて、お世話になります、ああきたんか、飯を食っていけとそれだけね。でも、話したいといったら三日も四日も話すこともあるし、逆に一週間一言もしゃべらなかったりする。その中で自分が何かを感じたらそれでいい。

野本 ぼくの場合、手紙がわりと多いんだけど、ある意味でどうしたらいいのか答えを渇望しているんだな。そこはもう自分で考えるべきで、苦しんで欲しいと思うんだけれど、そこの答を聞いたら自分もそれに合わせてやれるか反対するかはっきりできるから何か出してくれということなんだな……。ぼくの本を読んで手紙をくれる人が多いわけだけど、本というのは不特定多数にバッと語りかけちゃうわけで、もっと通じあえるコミュニケーションでやってゆかねばならぬと思う。

死に方と共同体

司会 山尾さんたちの雑誌づくりは、どんな風にやっているんですか。このごろ、山尾さんたちが書いた詩などが出てないですね。

山尾 最近、詩を書けないんですね。書ければ載せたいのだけれど、ああいう聖者がいっぱい流れてくるところに、自分の詩を出せないですね。このごろは、伝えたいことが自分にあるわけじゃなくて、たとえば本を読んでいて面白いなと思うものがあれば、それはたまたまぼくのところに送られてきたメッセージであるわけで、それを他の人にも伝えたいということですね。（最近の雑誌は、インドやチベットの聖者の言葉でみちている。）

野本 最近、翻訳が多いですね。

山尾 日本の中で、どこからもメッセージがこないんです。（笑）ほとんどインドのものなんだけど、どうもガンジスの流れのあたりから一番興味のあるメッセージが流れてくるようですね。それは結局、一人一人の人間の死に方などが問題になってくるんですね。それは生き方といってもいいんだけれど、そこに引っかかっちゃうと、どうもそれ以外のものに興味がなくなっちゃうんですね。

原 死に方ということ、三吉さん（野本）なんかどう思っている。

野本 えっ、死に方？ ぼくは死なないと思っているんだなあ。個体としてのぼくはいつか死ぬと思うけど、その死に方はどんな風でもかまわない。死んでぼく自身はなくなるけど、それでも生きているという感じは今するんだけど。だから、恐くないといったら嘘になるかも知れないけど、やっぱり恐くないんだな……。

原 いつでも思っているんだけど、ぼくは本当にどこかで野タレ死しやせんかなと思っている。何かが開けたらお釈迦さんのように大往生できるかも知れないけれど、今のままだと最後のドタン場まであがき通して野タレ死ぬんじゃないかという気がするんや。

山尾 一遍上人なんか野タレ死ですね。私が死んだら、死体はカラスがつついてくれといってる。芭蕉も一寸そういうところがある。ぼくは死に方にすごく興味があるんです。最近自分の心に残っている死に方がいくつかあるんですよね。赤軍派のリンチに会って殺されたあの死に方、殺した連中がどう死ぬのかということ、三島や川端康成の死に方など、いろんな死に方がある。

自分に近いのは一遍上人みたいな死に方なんですけど、それでもまだ一寸不満なんですね。それで十字架につけられて死んだキリストのことを考えるんですね。あれもきついと思うんですね。結局、一番いい死に方というのは、やはりお釈迦様が横になって、小鳥たちが集まってきて涙を流したりして、そういう死に方ですね。そこまで行けるかどうかわからない。おそらく今生(こんしょう)では行けないと思うけれど（笑）行きたいなあと思うんです。

死に方ということを共同体ということに結びつけていえば、現実の共同体というのは、死に方の共通した人が寄りあった集まりではないかという気がするんです。オレはこういう風にやって死ぬんだという連中が集まった時に、すばらしい共同体ができると思います。

野本 なるほど。（と強くうなづく）

山尾 今のところ、ぼくらの集まりというのは、原さんのいったような野タレ死だなあというのが集まっているんです。だから、通じるところは全部通じるし、こんなところで野タレ死ねないと思うと出てゆくわけです。

野本 そうだね、そういうことだろうな。

司会 死に方、生き方ということともかかわってくると思うけれど、「行(ぎょう)」とか「修行」とかいうものをどうとらえていますか。

野本 今まで自分自身が汚れているという感じがかなりあって、それをいかにして清めるかということで、断食からはじまっていろんなことをしたわけ。「行」をしている時は、宇宙と一体になったという感じで見事にスパッとするんだ。ところが、それが終って巷に帰って生活していると、また汚れてくる。どうも、それではおかしいんだな。

そこで、普通の生活そのものが実は「行」であるという風に、今は考え方が変わったんです。だから、食事をするのも、人と話すのも、仕事をするのも、すべてが行。つまり日常性すべてが行で、死ぬまで行というわけ。行という意識はその時すでになくて、理屈でいえば行ということになって、とくに断食したり滝にうたれたりする必要はない。したくなればしたって一向にかまわないけれど、別にそれにこだわらないわけです。

山尾 そうですね。ぼくはもし言葉でいうとしたら、やはり「行」といいたいですね。あえてそれをいうところから、宗教が生きたものとしてよみがえってくると思うんです。

男女の不思議

野本 男女の関係や性についてですが、山尾さんたちの場合、どう変化してきましたか。

山尾 だんだんセックスが清められていきますね。今の感じだと、だんだんセックスができなくなってきますね。ぼく自身の状態でいうと欲望みたいなものは逆に強まるんですが、現実にはできなくなってくるんです。これから先、どうなるかわかりませんが……。

原 若い人たちとああやって一緒に生活してみても、ポルノ調にはならないね。その点、どうやろうと自由にしてきたわけだけど、乱婚とかいう風にはならなくなってくるのね。

山尾 あれは不思議ですね。

原 だから、社会的な規則みたいなものはいらないような気がする。ない方がかえって、

自然にうまくゆくような気がする。

野本　社会的にこれとこれは夫婦だという風にしなくとも、自然にあれとあれとは似合いだという風にみんなもわかるんだね。

山尾　本当にそうですね。似合いというのは不思議ですよね。だれがみても似合いなんだな。似合いの二人がつくってきたオニギリの味は本当においしいんですよ、本当に。

原　よく男女の味わいとか何とかいうけど、それは日常生活の一つ一つにあらわれてくるのね。二人が本当に仲よくなってくると、今まで寝具がまっくろで放ったらかしていたのが、いつの間にかシーツなんかもきれいに洗濯してきちんとなってくるのね。すると、その周囲の人間のあつまりも、段々きれいになってくるのね。それが清められるということじゃないかな。ぼくらの生活体も、最近いつの間にかきれいになり出してきている。

山尾　たしかに寝具がきれいになるのは不思議ですね。（共感をこめていう）

野本　そうすると、関係そのものが自然になってくると、顕在化している事実も自然になってくるということだね。

司会　そういう自然な関係は、普通の体制の一環としての「家」ではなく「振出塾」とか「部族」とかいう自由な場をつくったからこそ出てきたんでしょうか。

原　普通の家なんかの場合だと、ルールとしてきれいにしなければならないというような形なわけ。ところが、「振出塾」なんかの場合、社会のルール（規則）からはみ出た人間が、ルールのない生活の中で自然にそうなってゆくわけです。

山尾　部族なんかの場合も、最初はメチャクチャでアナーキーな人間関係で、むしろそういったワーッと騒ぐような感じを望んでいたんですよね。

野本　つまり、しっとりした似合いの人間関係も、トコトンお互いに出し合わないと出てこないんじゃないか。そういう意味では、部族のはじめのころの実験的な形でのアナーキーな関係というのは、さけることができなかったという気がする。そういうことを通過しないで、今の普通の結婚のようにわり合いにタテマエの段階だけでつながり合っているような場合、ある困難な問題にぶつかった時に、簡単にくずれたりするんじゃないか。

山尾　電車にのったりすると新婚みたいな感じできれいな服装をした人がいますね。それもいいなあと思いますね。たまたま自分の場合、そんな道を踏みはずして違う道を歩いちゃったけれど、清潔なものとかきれいなものはいいなあと思いますよね。ただ、やはりそれにしばられたくないという感じはします。

原　本当に自由な形でやるといいのね。

暴力考

司会　暴力とか武力とかいうことが、このごろ非常に気になる問題なのですが、その辺のところはどうでしょうか。

山尾　やはり、ぼくは暴力はよくないと思いますね。ところが実際そう思っていても、一番手を出しやすいのは自分の子どもだったんです。（彼には三人の子どもがいる。）二年ぐらい前までは、いうことを聞かないと「このやろう」なんて思ってついひっぱたいていたんですけど、最近それができなくなってきましたね。それで、子どもにナメられちゃってね。（笑）

野本　ぼくはさっきの「来る者は拒まず、去る者は追わず」というのがポイントだと思う。来てはいけない、出てはいけない、オレと同じにならねばいけないと思っている時に、精神的とか物理的とかを問わず暴力的になるのではないか。暴力というのは、相手の存在そのものを抹殺し否定することなんだな。

　相手がどうであれ、まず肯定する、ダメだからダメというのではなく、まず事実としての相手の存在を認めた時に、全肯定の世界が開ける。それが佐藤栄作であれ、まずいいとして認めた上で、政策に反対するのは一向にかまわない。否定ではないんだな。否定する時には、暴力なり権力が出てくるわけだ。

　暴力に対して暴力で立ち向うかぎりは、自分も相手と同じ構造を持ってしまう。だから相手が暴力できた場合にも、暴力的な発想では立ち向わないということになる。

原　ぼくは、「やさしさ」だけでいけるんじゃないかと思う。

野本　「やさしさ」みたいなものが底にあれば、ぼくは子供をたたいてもいいと思うんだけど。

山尾　そうですか。（と軽く反論）

野本　ぼくが教師だった時に経験があるけど、たたくことによって、その子供とぼくが結ばれちゃうことがあるんです。たたかなくては関係がつながらないということがあった。それは相手の存在を抹殺するということではないんです。

山尾　それはありますね。そういう意味では、暴力の原理というのも、それはそれで事実として存在するわけです。ただ、自分としては、暴力とは縁のない世界に生きたいですね。

司会　大きな暴力、制度的な暴力ということについてはどう思いますか。マスコミの暴力というようなこともいわれていますが。

山尾　たしかに暴力的な現実がありますよね。でも、マスコミの現実も政治権力も事実としてあるわけで、それをもし否定するということになれば、それも一つの暴力になるんですよね。その意味では、どうしようもないんですよね。

　ぼくの考えでは、あらわれているものは全部、神のあらわれだと思うわけです。すると、暴力も罪も悲惨も全部、そのあらわれということになってくる。それを、消えちまえという風に否定することはできないわけです。

　ただ、そういうものはあまり見たくないという気はしますね。

司会　そういうものは変革されたり、よい方向に変わってゆくと考えていますか。

山尾　いや、変わってゆくとは全然思わないですね。永久に変わりないと思うんです。たとえば、宇宙の中で星が生まれて衰えて爆発したりして死んでゆくでしょう。それと同じように暴力も何もかも永久に存在しつづけると思えるんですね。

　だから、どういうところにコミットするということでしかないんではないかと思う。できればぼくも、原さんのように「やさしさ」にコミットできればいいと思いますね。まだ、ちっともできないんだけれど。（笑）

野本　大きな暴力ということだけど、生身の自分からしか発想できないとすると、それもわりと日常的な問題として入ってくるような気がするんです。自分なり自分に親しい人間が、ある力によってつれ去られてゆくことにどう対応するかという風なことですね。同じようにつれ去られたり殺されたりする人間は無数にあるわけで、それすべてに、あれもちょっと待て、これも待てというのでは、実際何もできない。

　だから、自分にできることは多くないわけだ。ということは、それぞれの人間が無数のところで無数の行動を起こしてゆく以外、全体としての権力なり暴力なりという問題も、もし何とかできるなら、開けてゆかないという気がします。

山尾　そうですね。それはささやかな願いで

すよね。（笑）そうあればよいという。

さて、これから？

司会　では、最後に、これからどうしてゆくかといったことを聞かせて欲しいのですが。

原　この間からいろいろな話し合いの場をもったのだけれど、その中で感じたのは、自分が本当にしたいことが何かということが、お互いにわからぬまままきたのではないかということだった。ぼく自身も最近になってようやく、自分のしたいことがオボロ気ながらわかってきた。現象面からは、「振出塾」でやったことみたいなことをすることが、本当に自分がやりたかったこととは違うと思うんです。しかし、そんなにはずれていないとも思うわけです。

最近、ぼく自身はもう適当にわずらわしくなって、早いとこ死ねたらいいなあという気もするんです。そやけど、生きている間は、あがきながらも生きにゃいかんと思うしね。

野本　オレはね、やっとオレの限界がわかったんだよ。今まではとんでもないことができるんじゃないかと思ってたけど、自分のできることには限界があるとわかってきたね。ということは、自分の生かせる場所というか、自分の力を出せる場所も大体見当がついてきたということだ。しかも、それをやるためには、非常に具体的なところで、具体的なことで、しかも具体的な人間を通してやってゆく以外にはないということなんだな。

それから、この個人誌を通して、五〇〇人ぐらいの人とコミュニケーションを持ってゆきたい。一寸多すぎるっていわれるんだけど、できると思う。

今のぼくの一つの課題は、言葉という問題をトコトン問いつめてみたいんだ。今の自分の表現は、まだ表現じゃないと思っているんだ。昔でいえば予言的な意味での詩ね、詩でありながらモウレツに現実的な世界をあらわせるような表現……。それから、今までは自分の内面を書きながら実は外の世界を書いていたんだけれど、外のことを書きながら実は自分のことを書いているような表現の世界というのを自分でつくり出してゆきたい。

「太陽」に非常なあこがれがあるわけ。最後に燃えつきていつか滅びてゆくけど、あますところなくまっ黒けになってカラカラになるまで燃えてゆくでしょ。それは、生き方の典型的な姿にみえる。そういう意味で、太陽がもう一度ぼくらの信仰の対象として復活してもいいと思って。

ぼくが太陽になれるかどうか、まったくわからないけれど、少なくとも太陽である人々をうつすことによって、記録することによって、自分自身もそうなってゆけるかも知れないという淡い期待をもって、記録しつづけてゆきたい。それがこれからのぼくの生き方になるような気がしています。

司会　山尾さんは？

山尾　今日は母の日なんですよね。（笑）これから一寸お袋のところへ行って、花でも持ってゆこうと思うんです。それがおわったら、夜十時から店（スナック「ほら貝」）に出る。そういうことを神ながらにやらしてもらえれば、一番いいと思います。

司会　今日は気持のよい話合いができて、本当にありがとうございました。

（この三人は、最年少の野本氏でも三〇才で、すでに「若者」とは呼べないかもしれない。だが、彼らは、若々しいしなやかな感性をもってこの現実を生き抜いているという意味で、若者の典型そのものともいえる。なお、この座談会の司会とまとめには制作部の岸田哲があたった。）

書評

若者たちの渇望

松本曜一著『我等ひゅうまん』

評者＝原田直子
（精神科病院勤務）

われわれが何かを〝体験〟するということはどういうことであろうか、という一つの大きなテーゼを具現した形で、彼ら「ひゅんまん」の運動がここにある。

「父母のない五人兄妹がそれぞれたくましく生きていく姿を描いた『若者たち』を見て共感した私は、この映画の若者たちのように生きたいと思い、今の生活状態からぬけ出すためにも郷里を出ようと親許・神戸を飛びだし、京都へ無一文で出て来た。」というのっけからのいかにも現代的な若者のいわゆる〝短絡的な思考〟を象徴するかのようなこの言葉に、私は私を含めた現代の若者たちの、〝直接的な〟〝体験〟に対する激しい渇望を見る。

高度に組織化・管理化されてゆく現代社会の合理的スピードに抗してというより、むしろ意識的に脱落者の道にのめりこもうと世の中からはみ出して、彼らは「自分の足で歩いて旅をする」ことを求め、リヤカーで街々を歩き、詩集「ひゅうまん」を通して直接に人々と対話しかかわろうとした。彼らは「お前がやらなくてもよい」「そんなことは国に任せておけばよい」「何もお前が参加したからと言って良くなる訳ではない」といった〝大人の論理〟を拒否して、あくまでも〝直接〟に自分たちの手で精薄児との「共同体施設」〈あらくさ〉を建設しようとした。

その建設途上のヴァイタリティあふれる極めて関西的なユーモラスな突き抜けた明かるさを追ってゆくと、彼らは実は「精薄児のために」というより自分たち自身のために、自分たちが一つのある対象（人或いは理念・もの）と深くかかわることによってその〝体験〟を通じ〝大人〟に成長してゆきたいという必死な希い・呼びかけが読みとれる。その求め方の激しさは、「ひゅうまん」運動途上、仲間の誰にも告げることなく自らの命を絶って逝った堀くんという若者の「あなたへの手紙」という一文に凝集された形で読む者を強く揺り動かす。

「きょうも、あなたは、僕を叱って下さいませんでしたね。いえ、でもお気になさらなくて結構です。待つことにはもう慣れっこなんですから。……ああ、僕は本当に、本当に疲れているんです。足は棒のようです。きょうの梅田地下はいつもにも増してほこりっぽい。あなたが『この馬鹿！恥さらし野郎！』と拳をふりあげてくるのはいつの日なんでしょう。そしてその怒りを、僕達と一緒に真の福祉世界追求へと向けてくれるのはいつの日でしょう。『頑張ってね』『頑張りましょうね』と言いかえて下さるのは一体いつ？

ええ、ぼくは、とてもがまん強いのです。だから、あなたが僕の手をとって『頑張ろうね』とおっしゃって下さるまで、僕は立ち続けることにします。」

人間が生きてゆく上に、その痛みが余りにも苦痛である場合、自然に生体反応が働いて私たちはそれを感じなくてすむということがよく言われる。外的刺激の全てを〝体験〟することはしないで適切な限定を加えて生きていられる状態——日常性を揺り動かす形でこの著者は、私たちに応えを迫っている。（あすなろ社　五七〇円）